

CHAPTER 5

「誰にー？」

「わが親愛なる母上にだよ」シリウスが言った。

「かれこれ一ヶ月もこれを取り外そうとして
いるんだが、この女は、カンバスの裏に『永久
粘着呪文』をかけたらしい。さあ、下に行
こう。急いで。ここの連中がまた目を覚ま
さないうちに」

「だけど、お母さんの肖像画がどうしてここ
にあるの？」ホールから階下に降りる扉を開
けると、狭い石の階段が続いていた。

その階段を下りながら、わけがわからず、ハ
リーが聞いた。

他のみんなも、二人のあとから下りてきた。

「誰も君に話していないのか？ここはわた
しの両親の家だった」シリウスが答えた。

「しかし、わたしがブラック家の最後の生き
残りだ。だから、いまはわたしの家だ。わた
しがダンブルドアに本部として提供した。ー
ーわたしには、それぐらいしか役に立つこと
がないんでね」

シリウスはハリーが期待していたような温か
い歓迎をしてくれなかったが、シリウスの言
い方がなぜか苦渋に満ちていることに、ハリ
ーは気づいていた。

ハリーは名付け親に従いて、階段を一番下
まで下り、地下の厨房に入る扉を通った。

そこは、上のホールとほとんど同じように暗
く、粗い石壁のがらんとした広い部屋だっ
た。

明かりといえば、厨房の奥にある大きな暖炉
の火ぐらいだ。

パイプの煙が、戦場の焼け跡の煙のように漂
い、その煙を通して、暗い天井から下がった
重い鉄鍋や釜が、不気味な姿を見せていた。
会議用に椅子がたくさん詰め込まれていたら
しい。

その真ん中に長い木のテーブルがあり、羊皮
紙の巻紙や杯、ワインの空き瓶、それにポロ
布の山のようなものが散らかっていた。

ウィーズリーおじさんは、テーブルの端のほ
うで長男のビルと額を寄せ合い、ひそひそ話
していた。

Chapter 5

The Order of the Phoenix

“Your — ?”

“My dear old mum, yeah,” said Sirius.
“We’ve been trying to get her down for a
month but we think she put a Permanent Stick-
ing Charm on the back of the canvas. Let’s get
downstairs, quick, before they all wake up
again.”

“But what’s a portrait of your mother doing
here?” Harry asked, bewildered, as they went
through the door from the hall and led the way
down a flight of narrow stone steps, the others
just behind them.

“Hasn’t anyone told you? This was my
parents’ house,” said Sirius. “But I’m the last
Black left, so it’s mine now. I offered it to
Dumbledore for headquarters — about the only
useful thing I’ve been able to do.”

Harry, who had expected a better welcome,
noted how hard and bitter Sirius’s voice
sounded. He followed his godfather to the
bottom of the stairs and through a door leading
into the basement kitchen.

It was scarcely less gloomy than the hall
above, a cavernous room with rough stone
walls. Most of the light was coming from a
large fire at the far end of the room. A haze of
pipe smoke hung in the air like battle fumes,
through which loomed the menacing shapes of
heavy iron pots and pans hanging from the
dark ceiling. Many chairs had been crammed
into the room for the meeting and a long
wooden table stood in the middle of the room,
littered with rolls of parchment, goblets, empty
wine bottles, and a heap of what appeared to be

ウィーズリーおばさんが咳払いをした。角縁メガネを掛け、痩せて、赤毛が薄くなりかかったウィーズリーおじさんが、振り返って、勢いよく立ち上がった。

「ハリー！」おじさんは急ぎ足で近づいてきて、ハリーの手を握り、激しく振った。

「会えてうれしいよ！」

おじさんの肩越しに、ビルが見えた。

相変わらず長髪をポニーテールにしている。ビルがテーブルに残っていた羊皮紙をさっと丸めるのが見えた。

「ハリー、旅は無事だったかい？」十本以上もの巻紙を一度に集めようとしながら、ビルが声をかけた。

「それじゃ、マッドアイは、グリーンランド上空を経由しなかったんだね？」

「そうしようとしたわよ」トンクスがそう言いながら、ビルを手伝いにすたすた近づいてきたが、たちまち、最後に一枚残っていた羊皮紙の上に蠟燭を引っくり返した。

「あ、しまったーごめんー」

「任せて」ウィーズリーおばさんが、呆れ顔で言いながら、杖の一振りで羊皮紙を元に戻した。

おばさんの呪文が放った閃光で、ハリーは建物の見取り図のようなものをちらりと見た。ウィーズリーおばさんはハリーが見ていることに気づき、見取り図をテーブルからさっと取り上げ、すでに溢れそうになっているビルの腕の中に押し込んだ。

「こういうものは、会議が終わったら、すぐに片づけないといけません」おばさんはびしゃりと言うと、さっさと古びた食器棚のほうに行き、中から夕食用のお皿を取り出しはじめた。

ビルは杖を取り出し、「エハネスコ！消えよ！」と呟いた。

巻紙が消え去った。

「掛けなさい、ハリー」シリウスが言った。「マンダンガスには会ったことがあるね？」ハリーがポロ布の山だと思っていたものが、クウーッと長いいびきをかいだと思うと、がばっと目を覚ました。「だんか、おんの名、呼んだか？」マンダンガスが眠そうにボソボソ言った。

rag. Mr. Weasley and his eldest son, Bill, were talking quietly with their heads together at the end of the table.

Mrs. Weasley cleared her throat. Her husband, a thin, balding, red-haired man, who wore horn-rimmed glasses, looked around and jumped to his feet.

“Harry!” Mr. Weasley said, hurrying forward to greet him and shaking his hand vigorously. “Good to see you!”

Over his shoulder Harry saw Bill, who still wore his long hair in a ponytail, hastily rolling up the lengths of parchment left on the table.

“Journey all right, Harry?” Bill called, trying to gather up twelve scrolls at once. “Mad-Eye didn’t make you come via Greenland, then?”

“He tried,” said Tonks, striding over to help Bill and immediately sending a candle toppling onto the last piece of parchment. “Oh no — sorry —”

“Here, dear,” said Mrs. Weasley, sounding exasperated, and she repaired the parchment with a wave of her wand: In the flash of light caused by Mrs. Weasley’s charm, Harry caught a glimpse of what looked like the plan of a building.

Mrs. Weasley had seen him looking. She snatched the plan off the table and stuffed it into Bill’s heavily laden arms.

“This sort of thing ought to be cleared away promptly at the end of meetings,” she snapped before sweeping off toward an ancient dresser from which she started unloading dinner plates.

Bill took out his wand, muttered “*Evanescio!*” and the scrolls vanished.

“Sit down, Harry,” said Sirius. “You’ve met

「俺は、シリウスさん成する……」マンダンガスは投票でもするように、汚らしい手を挙げた。
血走った垂れ目はどろんとして焦点が合っていない。
ジニーがクスクス笑った。
「会議は終わってるんだ、ダング」シリウスが言った。
周りのみんなもテーブルに着いていた。
「ハリーが到着したんだよ」
「はあ？」マンダンガスは赤茶けたくしゃくしゃの髪の毛を透かして、ハリーを惨めっぽく見た。
「ほー。着いたンか。ああ……元気か、アリー？」
「うん」ハリーが答えた。
マンダンガスは、ハリーを見つめたままそわそわとポケットをまさぐり、煤けたパイプを引っ張り出した。
パイプを口に突っ込み、杖で火を点け、深く吸い込んだ。
緑がかった煙がもくもくと立ち昇り、たちまちマンダンガスの顔に煙幕を張った。
「あんたにゃ、あやまんにゃならん」臭い煙の中から、ブツブツ言う声が聞こえた。
「マンダンガス、何度言ったらわかるの」ウィーズリーおばさんが向こうのほうから注意した。
「お願いだから、厨房ではそんなもの吸わないで。とくにこれから食事っていうときに！」
「あー」マンダンガスが言った。
「うん。モリー、すまん」
マンダンガスがポケットにパイプをしまうと、もくもくは消えた。
しかし、靴下の焦げるような刺激臭が漂っていた。
「それに、真夜中にならないうちに夕食を食べたいなら、手を貸してちょうだいな」ウィーズリーおばさんがみんなに声をかけた。
「あら、ハリー、あなたはじっとしてていいのよ。長旅だったもの」
「モリー、何しようか？」トンクスが、なんでもするわとばかり、弾むように進み出た。
ウィーズリーおばさんが、心配そうな顔で戸

Mundungus, haven't you?"

The thing Harry had taken to be a pile of rags gave a prolonged, grunting snore and then jerked awake.

"Some'n say m' name?" Mundungus mumbled sleepily. "I 'gree with Sirius. ..."

He raised a very grubby hand in the air as though voting, his droopy, bloodshot eyes unfocused. Ginny giggled.

"The meeting's over, Dung," said Sirius, as they all sat down around him at the table. "Harry's arrived."

"Eh?" said Mundungus, peering balefully at Harry through his matted ginger hair. "Blimey, so 'e 'as. Yeah ... you all right, 'arry?"

"Yeah," said Harry.

Mundungus fumbled nervously in his pockets, still staring at Harry, and pulled out a grimy black pipe. He stuck it in his mouth, ignited the end of it with his wand, and took a deep pull on it. Great billowing clouds of greenish smoke obscured him in seconds.

"Owe you a 'pology," grunted a voice from the middle of the smelly cloud.

"For the last time, Mundungus," called Mrs. Weasley, "will you please *not* smoke that thing in the kitchen, especially not when we're about to eat!"

"Ah," said Mundungus. "Right. Sorry, Molly."

The cloud of smoke vanished as Mundungus stowed his pipe back in his pocket, but an acrid smell of burning socks lingered.

"And if you want dinner before midnight I'll need a hand," Mrs. Weasley said to the room at large. "No, you can stay where you

惑った。

「えーと、結構よ、トンクス。あなたも休んでらっしゃい。今日は十分働いたし」

「ううん。わたし、手伝いたいの！」

トンクスが明るく言い、ジニーがナイフやフォークを取り出している食器棚のほうに急いで行こうとして、途中の椅子を蹴飛ばして倒した。

まもなく、ウィーズリーおじさんの指揮下で、大きな包丁が何丁も勝手に肉や野菜を刻みはじめた。

おばさんは火に掛けた大鍋を掻き回し、他のみんなは皿や追加の杯、貯蔵室からの食べ物を選んでいた。

ハリーはシリウス、マンダンガスとテーブルに取り残され、マンダンガスは相変わらず申し訳なさそうに目をしょぼつかせていた。

「フィギーばあさんに、あのあと会ったか？」マンダンガスが聞いた。

「ううん」ハリーが答えた。

「誰にも会ってない」

「なあ、おれ、持ち場をはなれたんは」縋るような口調で、マンダンガスは身を乗り出した。

「商売のチャンスがあったンでー」

ハリーは、膝を何かで擦られたような気がしてびっくりしたが、何のことはない、ハーマイオニーのペットで、オレンジ色の猫、ガ二股のクルックシャンクスだった。

甘え声を出してハリーの足の周りをひと巡りし、それからシリウスの膝に跳び乗って丸くなった。

シリウスは無意識に猫の耳の後ろをカリカリ掻きながら、相変わらず固い表情でハリーのほうを見た。

「夏休みは、楽しかったか？」

「ううん、ひどかった」ハリーが答えた。

シリウスの顔に、初めてニヤッと笑みが走った。

「わたしに言わせれば、君がなんで文句を言うのかわからないね」

「えっ？」ハリーは耳を疑った。

「わたしなら、吸魂鬼に襲われるのは歓迎だったろう。命を賭けた死闘でもすれば、この退屈さも見事に破られたろうに。君はひどい

are, Harry dear, you've had a long journey —”

“What can I do, Molly?” said Tonks enthusiastically, bounding forward.

Mrs. Weasley hesitated, looking apprehensive.

“Er — no, it's all right, Tonks, you have a rest too, you've done enough today —”

“No, no, I want to help!” said Tonks brightly, knocking over a chair as she hurried toward the dresser from which Ginny was collecting cutlery.

Soon a series of heavy knives were chopping meat and vegetables of their own accord, supervised by Mr. Weasley, while Mrs. Weasley stirred a cauldron dangling over the fire and the others took out plates, more goblets, and food from the pantry. Harry was left at the table with Sirius and Mundungus, who was still blinking mournfully at him.

“Seen old Figgy since?” he asked.

“No,” said Harry, “I haven't seen anyone.”

“See, I wouldn't 'ave left,” said Mundungus, leaning forward, a pleading note in his voice, “but I 'ad a business opportunity —”

Harry felt something brush against his knees and started, but it was only Crookshanks, Hermione's bandy-legged ginger cat, who wound himself once around Harry's legs, purring, then jumped onto Sirius's lap and curled up. Sirius scratched him absentmindedly behind the ears as he turned, still grim-faced, to Harry.

“Had a good summer so far?”

“No, it's been lousy,” said Harry.

For the first time, something like a grin

目に遭ったと思っているだろうが、少なくとも外に出て歩き回ることができた。手足を伸ばせし、喧嘩も戦いもやった——わたしはこの一ヶ月、ここに缶詰だ」

「どうして？」ハリーは顔をしかめた。

「魔法省がまだわたしを追っているからだ。それに、ヴォルデモートはもうわたしが『動物もどき』だと知っているはずだ。ワームテールが話してしまったろうから。だからわたしの変装も役に立たない。不死鳥の騎士団のためにわたしができることはほとんどない…少なくともダンブルドアはそう思っている」

ダンブルドアの名前を言うとき、シリウスの声がわずかに曇った。

それがハリーに、シリウスもダンブルドア校長に不満があることを物語っていた。

名付け親のシリウスに対して、ハリーは急に熱い気持ちが込み上げてきた。

「でも、少なくとも、何が起きているかは知っていたでしょう？」ハリーは励ますように言った。

「ああ、そうとも」シリウスは自虐的な言い方をした。

「スネイプの報告を聞いて、あいつが命を懸けているのに、わたしはここでのうのうと居心地よく暮らしているなんて、嫌味な当て擦りをたっぷり聞いて……大掃除は進んでいるか、なんてやつに聞かれて——」

「大掃除って？」ハリーが聞いた。

「ここを人間が住むのにふさわしい場所になっている」シリウスが、手を振るようにして陰気な厨房全体を指した。

「ここには十年間誰も住んでいなかった。親愛なる母上が死んでからはね。年寄りの屋敷しもべ妖精を別にすればだが。やつはひねくれている——何年もまったく掃除していない」

「シリウス」マンダンガスは、話のほうにはまったく耳を傾けていなかったようだが、空の杯をしげしげと眺めていた。

「こりゃ、純銀かね、おい？」

「そうだ」シリウスはいまいましげに杯を調べた。

「十五世紀にゴブリンが鍛えた最高級の銀

flitted across Sirius's face.

“Don't know what you're complaining about, myself.”

“What?” said Harry incredulously.

“Personally, I'd have welcomed a dementor attack. A deadly struggle for my soul would have broken the monotony nicely. You think you've had it bad, at least you've been able to get out and about, stretch your legs, get into a few fights. ... I've been stuck inside for a month.”

“How come?” asked Harry, frowning.

“Because the Ministry of Magic's still after me, and Voldemort will know all about me being an Animagus by now, Wormtail will have told him, so my big disguise is useless. There's not much I can do for the Order of the Phoenix ... or so Dumbledore feels.”

There was something about the slightly flattened tone of voice in which Sirius uttered Dumbledore's name that told Harry that Sirius was not very happy with the headmaster either. Harry felt a sudden upsurge of affection for his godfather.

“At least you've known what's been going on,” he said bracingly.

“Oh yeah,” said Sirius sarcastically. “Listening to Snape's reports, having to take all his snide hints that he's out there risking his life while I'm sat on my backside here having a nice comfortable time ... asking me how the cleaning's going —”

“What cleaning?” asked Harry.

“Trying to make this place fit for human habitation,” said Sirius, waving a hand around the dismal kitchen. “No one's lived here for ten years, not since my dear mother died, unless you count her old house-elf, and he's gone

だ。ブラック家の家紋が型押ししてある」
「どっこい、そいつは消せるはずだ」マンダンガスは袖口で磨きをかけながら呟いた。
「フレッド—ジョージ、おやめっ、普通に運びなさい！」ウィーズリーおばさんがひめい悲鳴をあげた。
ハリー、シリウス、マンダンガスが振り返り、間髪を容れず、三人ともテーブルから飛び退いた。
フレッドとジョージが、シチューの大鍋、バタービールの大きな鉄製の広ロジャー、重い木製のパン切り板、しかもナイフつきを、一緒くたにテーブルめがけて飛ばせたのだ。
シチューの大鍋は、木製のテーブルの端から端まで、長い焦げ跡を残して滑り、落ちる寸前で止まった。
バタービールの広ロジャーがガシャンと落ちて、中身があたり中に飛び散った。
パン切りナイフは切り板から滑り落ち、切っ先を下にして着地し、不気味にプルプル振動している。
いましがたシリウスの右手があった、ちょうどその場所だ。
「まったくもう！」ウィーズリーおばさんが叫んだ。
「そんな必要ないでしょっ！ もうたくさん—おまえたち、もう魔法を使ってもいいからって、何でもかんでもいちいち杖を振る必要はないのっ！」
「僕たち、ちょっと時間を節約しようとしたんだよ」フレッドが急いで進み出て、テーブルからパンナイフを抜き取った。
「ごめんよ、シリウス—わざとじゃないぜ—」
ハリーもシリウスも笑っていた。
マンダンガスは椅子から仰向けに転げ落ちていたが、悪態をつきながら立ち上がった。
クルックシャンクスはシャーッと怒り声を出して食器棚の下に飛び込み、真っ暗な所で、大きな黄色い目をギラつかせていた。そしてハーマイオニーは時が止まったように口を開けて、こちらを眺めていた。
「おまえたち」シチューの鍋をテーブルの真ん中に戻しながら、ウィーズリーおじさんが言った。

round the twist, hasn't cleaned anything in ages —”

“Sirius?” said Mundungus, who did not appear to have paid any attention to this conversation, but had been minutely examining an empty goblet. “This solid silver, mate?”

“Yes,” said Sirius, surveying it with distaste. “Finest fifteenth-century goblin-wrought silver, embossed with the Black family crest.”

“That'd come off, though,” muttered Mundungus, polishing it with his cuff.

“Fred — George — NO, JUST CARRY THEM!” Mrs. Weasley shrieked.

Harry, Sirius, and Mundungus looked around and, a split second later, dived away from the table. Fred and George had bewitched a large cauldron of stew, an iron flagon of butterbeer, and a heavy wooden breadboard, complete with knife, to hurtle through the air toward them. The stew skidded the length of the table and came to a halt just before the end, leaving a long black burn on the wooden surface, the flagon of butterbeer fell with a crash, spilling its contents everywhere, and the bread knife slipped off the board and landed, point down and quivering ominously, exactly where Sirius's right hand had been seconds before.

“FOR HEAVEN'S SAKE!” screamed Mrs. Weasley. “THERE WAS NO NEED — I'VE HAD ENOUGH OF THIS — JUST BECAUSE YOU'RE ALLOWED TO USE MAGIC NOW YOU DON'T HAVE TO WHIP YOUR WANDS OUT FOR EVERY TINY LITTLE THING!”

“We were just trying to save a bit of time!” said Fred, hurrying forward and wrenching the bread knife out of the table. “Sorry Sirius, mate

「母さんが正しい。おまえたちも成人したんだから、責任感というものを見せないと——」

「兄さんたちはこんな問題を起こしたことがなかったわ！」ウィーズリーおばさんが二人を叱りつけながら、バタービールの新しい広ロジャーをテーブルにドンと叩きつけた。中身がさっきと同じぐらいこぼれた。

「ビルは、一メートルごとに『姿現わし』する必要なぞ感じなかったわ！チャーリーは、何にでも見境なしに呪文をかけたりしなかった！パーシーは——」

突然おばさんの言葉が途切れ、息を殺し、恐々ウィーズリーおじさんの顔を見た。

おじさんは、急に無表情になっていた。

「さあ、食べよう」ビルが急いで言った。

「モリー、おいしそうだよ」おばさんのために皿にシチューをよそい、テーブル越しに差し出しながら、ルーピンが言った。

しばらくの間、皿やナイフ、フォークのカチャカチャいう音や、みんながテーブルに椅子を引き寄せる音がするだけで、誰も話をしなかった。

そして、ウィーズリーおばさんがシリウスに話しかけた。

「ずっと話そうと思ってたんだけどね、シリウス、客間の文机に何か閉じ込められているの。しょっちゅうガタガタ揺れているわ。もちろん単なる『まね妖怪』かもしれないけど、出してやる前に、アラスターに頼んで見てもらわないといけないと思うの」

「お好きなように」シリウスはどうでもいいというような口調だった。

「客間のカーテンは噛みつき妖精のドクシーがいっぱいだし」ウィーズリーおばさんはしゃべり続けた。

「明日あたりみんなで退治したいと思ってるんだけど」

「楽しみだね」シリウスが答えた。

ハリーは、その声に皮肉な響きを聞き取ったが、他の人もそう聞こえたかどうかはわからなかった。

ハリーの向かい側で、トンクスが、食べ物を頬張る合間に鼻の形を変えて、ハーマイオニーとジニーを楽しませていた。

— didn't mean to —”

Harry and Sirius were both laughing. Mundungus, who had toppled backward off his chair, was swearing as he got to his feet. Crookshanks had given an angry hiss and shot off under the dresser, from whence his large yellow eyes glowed in the darkness.

“Boys,” Mr. Weasley said, lifting the stew back into the middle of the table, “your mother’s right, you’re supposed to show a sense of responsibility now you’ve come of age —”

“— none of your brothers caused this sort of trouble!” Mrs. Weasley raged at the twins, slamming a fresh flagon of butterbeer onto the table and spilling almost as much again. “Bill didn’t feel the need to Apparate every few feet! Charlie didn’t Charm everything he met! Percy —”

She stopped dead, catching her breath with a frightened look at her husband, whose expression was suddenly wooden.

“Let’s eat,” said Bill quickly.

“It looks wonderful, Molly,” said Lupin, ladling stew onto a plate for her and handing it across the table.

For a few minutes there was silence but for the chink of plates and cutlery and the scraping of chairs as everyone settled down to their food. Then Mrs. Weasley turned to Sirius and said, “I’ve been meaning to tell you, there’s something trapped in that writing desk in the drawing room, it keeps rattling and shaking. Of course, it could just be a boggart, but I thought we ought to ask Alastor to have a look at it before we let it out.”

“Whatever you like,” said Sirius indifferently.

ハリーの部屋でやって見せたように、「痛いっ」という表情で目をぎゅっとつぶったかと思うと、トンクスの鼻が膨れ上がってスネイプの鉤鼻のように盛り上がったり、縮んで小さなマッシュルームのようになったり、鼻の穴からわっと鼻毛が生えたりしている。どうやら、食事のときのお馴染みの余興になっているらしく、まもなくハーマイオニーとジニーが、お気に入りの鼻をせがみはじめた。

「豚の鼻みたいの、やって。トンクス」

トンクスがリクエストに応えた。

目を上げたハリーは、一瞬、女性のダドリーがテーブルの向こうから笑いかけているような気がした。

ウィーズリーおじさん、ビル、ルーピンは小鬼について話し込んでいた。

「連中はまだ何にも漏らしていないんですよ」ビルが言った。

「『例のあの人』が戻ってきたことを、連中が信じているのかいないのか、僕にはまだ判断がつかない。むろん、連中にしてみれば、どちらにも味方しないではうがいいんだ。何にもかかわらずに」

「連中は『例のあの人』側につくことはないと思うね」ウィーズリーおじさんが頭を振りながら言った。

「連中も痛手を被ったんだ。前回、ノッティンガムの近くで『あの人』に殺されたゴブリンの一家のことを憶えてるだろう？」

「私の考えでは、見返りが何かによるでしょう」ルーピンが言った。

「金のことじゃないんですよ。我々魔法使いが、連中に対して何世紀も拒んできた、自由を提供すれば、連中も気持ちが悪くでしょう。ビル、ラグノックの件はまだ上手いかわからないのかね？」

「いまのところ、魔法使いへの反感が相当強いですね」ビルが言った。

「バグマンの件で、まだ罵り続けていますよ。ラグノックは、魔法省が隠蔽工作をしたと考えています。例のゴブリンたちは、結局バグマンから金をせしめることができなかったんです。それで――」

テーブルの真ん中から、大爆笑が上がりビル

“The curtains in there are full of doxies too,” Mrs. Weasley went on. “I thought we might try and tackle them tomorrow.”

“I look forward to it,” said Sirius. Harry heard the sarcasm in his voice, but he was not sure that anyone else did.

Opposite Harry, Tonks was entertaining Hermione and Ginny by transforming her nose between mouthfuls. Screwing up her eyes each time with the same pained expression she had worn back in Harry’s bedroom, her nose swelled to a beaklike protuberance like Snape’s, shrank to something resembling a button mushroom, and then sprouted a great deal of hair from each nostril. Apparently this was a regular mealtime entertainment, because after a while Hermione and Ginny started requesting their favorite noses.

“Do that one like a pig snout, Tonks ...”

Tonks obliged, and Harry, looking up, had the fleeting impression that a female Dudley was grinning at him from across the table.

Mr. Weasley, Bill, and Lupin were having an intense discussion about goblins.

“They’re not giving anything away yet,” said Bill. “I still can’t work out whether they believe he’s back or not. ’Course, they might prefer not to take sides at all. Keep out of it.”

“I’m sure they’d never go over to You-Know-Who,” said Mr. Weasley, shaking his head. “They’ve suffered losses too. Remember that goblin family he murdered last time, somewhere near Nottingham?”

“I think it depends what they’re offered,” said Lupin. “And I’m not talking about gold; if they’re offered freedoms we’ve been denying them for centuries they’re going to be tempted. Have you still not had any luck with Ragnok,

の言葉を掻き消してしまった。

フレッド、ジョージ、ロン、マンダンガスが椅子の上で笑い転がっていた。

「……それでしょう」マンダンガスが笑いすぎて涙を流し、息を詰まらせながらしゃべっていた。

「そんで、信じられねえかもしんねえけどよう、あいつが俺に、俺によ、こう言うんだ。『あー、ダング、ヒキガエルをそんなに、どっから手に入れたね？ なにせ、どっかのならずもんが、俺のヒキガエルを全部盗みやがったんで』俺は言ってやったね。『ウィル、おめえのヒキガエルを全部？ 次はなにが起こるかかわかったもんじゃねえなあ？ そんで、おめえは、ヒキガエルを何匹かほしいってえわけだな？』そんでよう、信じられるけえ？ あの脳たりんのガーゴイルめ、俺が持ってた、やつ（ヒキガエル）をそっくり買い戻しやがった。最初にやつ（ヒキガエル）が払った値段よりずっと高い金でようー」

ロンがテーブルに突っ伏して、大笑いした。

「マンダンガス、あなたの商売の話は、もうこれ以上聞きたりありません。もう結構」ウィーズリーおばさんが厳しい声で言った。

「ごめんよ、モリー」マンダンガスが涙を拭い、ハリーにウィンクしながら謝った。

「だけんどよう、もともとそのヒキガエル、ウィルのやつ（ヒキガエル）がウォーティ・ハリスから盗んだんだぜ。だから、おれはなんも悪いことはしちやいねえ」

「あなたが、いったいどこで善悪を学んだかは存じませんがね、マンダンガス、でも、大切な授業をいくつか受け損ねたようね」ウィーズリーおばさんが冷たく言った。

フレッドとジョージはバタービール（Butterbeer）の杯に顔を隠し、ジョージはしゃっくりしていた。

ウィーズリーおばさんは、立ち上がってデザート（dessert）の大きなルバーブ・クランブル（Rhubarb Crumble）を取りにいく前に、なぜかいやな顔をして、シリウスをちらりと睨みつけた。

ハリーは名付け親を振り返った。

「モリーはマンダンガスを認めていないんだ」シリウスが低い声で言った。

「どうしてあの人（マンダンガス）が騎士団に入ってるの？」ハリーもこっそり聞いた。

Bill?”

“He’s feeling pretty anti-wizard at the moment,” said Bill. “He hasn’t stopped raging about the Bagman business, he reckons the Ministry did a cover-up, those goblins never got their gold from him, you know —”

A gale of laughter from the middle of the table drowned the rest of Bill’s words. Fred, George, Ron, and Mundungus were rolling around in their seats.

“... and then,” choked Mundungus, tears running down his face, “and then, if you’ll believe it, ’e says to me, ’e says, ‘ere, Dung, where didja get all them toads from? ’Cos some son of a Bludger’s gone and nicked all mine!’ And I says, ‘Nicked all your toads, Will, what next? So you’ll be wanting some more, then?’ And if you’ll believe me, lads, the gormless gargoyle buys all ’is own toads back orf me for twice what ’e paid in the first place —”

“I don’t think we need to hear any more of your business dealings, thank you very much, Mundungus,” said Mrs. Weasley sharply, as Ron slumped forward onto the table, howling with laughter.

“Beg pardon, Molly,” said Mundungus at once, wiping his eyes and winking at Harry. “But, you know, Will nicked ’em orf Warty Harris in the first place so I wasn’t really doing nothing wrong —”

“I don’t know where you learned about right and wrong, Mundungus, but you seem to have missed a few crucial lessons,” said Mrs. Weasley coldly.

Fred and George buried their faces in their goblets of butterbeer; George was hiccuping. For some reason, Mrs. Weasley threw a very nasty look at Sirius before getting to her feet

「あいつは役に立つ」シリウスが呟いた。
「ならず者を全部知っている。そりゃ、知っているだろう。あいつもその一人だしな。しかし、あいつはダンブルドアに忠実だ。一度危ないところを救われたから。ダングのようなのが一人いると、それなりに価値がある。あいつはわたしたちの耳に入っていないようなことを聞き込んでくる。しかし、モリーは、あいつを夕食に招待するのはやりすぎだと思ってる。君を見張るべきときに、任務を放ったらかしにして消えたことで、モリーはまだあいつを許していないんだよ」
ルバーブ クランブルにカスタードクリームをかけて、三回もお代わりしたあと、ハリーは、ジーンズのベルトが気持ち悪いほどきつく感じた（これはただごとではなかった。なにしろダドリーのお下がりジーンズなのだから）。
ハリーがスプーンを置くころは、会話もだいたい一段落していた。
ウィーズリーおじさんは、満ち足りてくつろいだ様子で椅子に寄り掛かり、トンクスは鼻が元どおりになり大欠伸をしていた。
ジニーはクルックシャンクスを食器棚の下から誘い出し、床にあぐらをかき、バターピールのコルク栓を転がして猫に追わせていた。
「もうおやすみの時間ね」ウィーズリーおばさんが、欠伸しながら言った。
「いや、モリー、まだだ」シリウスが空になった自分の皿を押し退け、ハリーのほうを向いて言った。
「いいか、君には驚いたよ。ここに着いたとき、君は真っ先にヴォルデモートのことを開くだろうと思っていたんだが」
部屋の雰囲気さがさっと変わった。
吸魂鬼が現れたときのような急激な変化だと、ハリーは思った。
一瞬前は、眠たげでくつろいでいたのに、いまや、警戒し、張りつめている。
ヴォルデモートの名前が出た瞬間、テーブル全体に戦慄が走った。
ちょうどワインを飲もうとしていたルーピンは、緊張した面持ちで、ゆっくりと杯を下に置いた。
「聞いたよ！」ハリーは憤慨した。

and going to fetch a large rhubarb crumble for pudding. Harry looked round at his godfather.

“Molly doesn’t approve of Mundungus,” said Sirius in an undertone.

“How come he’s in the Order?” Harry said very quietly.

“He’s useful,” Sirius muttered. “Knows all the crooks — well, he would, seeing as he’s one himself. But he’s also very loyal to Dumbledore, who helped him out of a tight spot once. It pays to have someone like Dung around, he hears things we don’t. But Molly thinks inviting him to stay for dinner is going too far. She hasn’t forgiven him for slipping off duty when he was supposed to be tailing you.”

Three helpings of rhubarb crumble and custard later and the waistband on Harry’s jeans was feeling uncomfortably tight (which was saying something, as the jeans had once been Dudley’s). He lay down his spoon in a lull in the general conversation. Mr. Weasley was leaning back in his chair, looking replete and relaxed, Tonks was yawning widely, her nose now back to normal, and Ginny, who had lured Crookshanks out from under the dresser, was sitting cross-legged on the floor, rolling butterbeer corks for him to chase.

“Nearly time for bed, I think,” said Mrs. Weasley on a yawn.

“Not just yet, Molly,” said Sirius, pushing away his empty plate and turning to look at Harry. “You know, I’m surprised at you. I thought the first thing you’d do when you got here would be to start asking questions about Voldemort.”

The atmosphere in the room changed with the rapidity Harry associated with the arrival of dementors. Where seconds before it had been

「ロンとハーマイオニーに聞いた。でも、二人が言ったんだ。僕たちは騎士団に入れてもらえないから、だからー」

「二人の言うとおりよ」ウィーズリーおばさんが言った。

「あなたたちはまだ若すぎるの」おばさんは背筋をぴんと伸ばして椅子に掛けていた。

椅子の肘掛けに置いた両手を固く握り締め、眠気などひと欠けらも残っていない。

「騎士団に入っていないければ質問してはいけないと、いつからそう決まったんだ？」

シリウスが聞いた。

「ハリーはあのマグルの家に一ヵ月も閉じ込められていた。何が起こったのかを知る権利があるー」

「ちょっと待った！」ジョージが大声で遮った。

「なんでハリーだけが質問に答えてもらえるんだ？」

フレッドが怒ったように言った。

「僕たちだって、この一ヶ月、みんなから聞き出そうとしてきた。なのに、誰も何ひとつ教えてくれやしなかった！」ジョージが言った。

「『あなたはまだ若すぎます。あなたは騎士団に入っていません』」フレッドが紛れもなく母親の声だとわかる高い声を出した。

「ハリーはまだ成人にもなってないんだぜ！」

「騎士団が何をしているのか、君たちが教えてもらえなかったのは、わたしの責任じゃない」

シリウスが静かに言った。

「それは、君たちのご両親の決めたことだ。ところが、ハリーのほうはー」

「ハリーにとって何がいいのかを決めるのは、あなたではないわ！」ウィーズリーおばさんが鋭く言った。

いつもはやさしいおばさんの顔が、陰しくなっていた。

「ダンブルドアがおっしゃったことを、よもやお忘れじゃないでしょうね？」

「どのお言葉でしょうね？」シリウスは礼儀正しかったが、戦いに備えた男の雰囲気漂

sleepily relaxed, it was now alert, even tense. A frisson had gone around the table at the mention of Voldemort's name. Lupin, who had been about to take a sip of wine, lowered his goblet slowly, looking wary.

“I did!” said Harry indignantly. “I asked Ron and Hermione but they said we’re not allowed in the Order, so —”

“And they’re quite right,” said Mrs. Weasley. “You’re too young.”

She was sitting bolt upright in her chair, her fists clenched upon its arms, every trace of drowsiness gone.

“Since when did someone have to be in the Order of the Phoenix to ask questions?” asked Sirius. “Harry’s been trapped in that Muggle house for a month. He’s got the right to know what’s been happen —”

“Hang on!” interrupted George loudly.

“How come Harry gets his questions answered?” said Fred angrily.

“We’ve been trying to get stuff out of you for a month and you haven’t told us a single stinking thing!” said George.

“‘You’re too young, you’re not in the Order,’ ” said Fred, in a high-pitched voice that sounded uncannily like his mother’s. “Harry’s not even of age!”

“It’s not my fault you haven’t been told what the Order’s doing,” said Sirius calmly. “That’s your parents’ decision. Harry, on the other hand —”

“It’s not down to you to decide what’s good for Harry!” said Mrs. Weasley sharply. Her normally kindly face looked dangerous. “You haven’t forgotten what Dumbledore said, I suppose?”

わせていた。

「ハリーが知る必要があること以外は話してはならない、とおっしゃった言葉です」ウィーズリーおばさんは最初の件をことさらに強調した。

ロン、ハーマイオニー、フレッド、ジョージの四人の頭が、シリウスとウィーズリー夫人の間を、テニスのラリーを見るように往復した。

ジニーは、散らばったバタービールのコルク栓の山の中に膝をつき、口を微かに開けて、二人のやりとりを見つめていた。

ルービンの目は、シリウスに釘づけになっていた。

「わたしは、ハリーが知る必要があること以外に、この子に話してやるつもりはないよ、モリー」シリウスが言った。

「しかし、ハリーがヴォルデモートの復活を目撃した者である以上（ヴォルデモートの名が、またしてもテーブル中を一斉に身震いさせた）、ハリーは大方の人間より以上に——」

「この子は不死鳥の騎士団のメンバーではありません！」ウィーズリーおばさんが言った。

「この子はまだ十五歳です。それに——」

「それに、ハリーは騎士団の大多数のメンバーに匹敵するほどの、いや、何人かを凌ぐほどのことをやり遂げてきた」

「誰も、この子がやり遂げたことを否定しやしません！」ウィーズリーおばさんの声が一段と高くなり、拳が椅子の肘掛けで震えていた。

「でも、この子はまだ——」

「ハリーは子どもじゃない！」シリウスがイライラと言った。

「大人でもありませんわ！」ウィーズリーおばさんは、頬を紅潮させていた。

「シリウス、この子はジェームズじゃないのよ！」

「お言葉だが、モリー、わたしは、この子が誰か、はっきりわかっているつもりだ」シリウスが冷たく言った。

「私にはそう思えないわ！」ウィーズリーおばさんが言った。

“Which bit?” Sirius asked politely, but with an air as though readying himself for a fight.

“The bit about not telling Harry more than he *needs to know*,” said Mrs. Weasley, placing a heavy emphasis on the last three words.

Ron, Hermione, Fred, and George’s heads turned from Sirius to Mrs. Weasley as though following a tennis rally. Ginny was kneeling amid a pile of abandoned butterbeer corks, watching the conversation with her mouth slightly open. Lupin’s eyes were fixed on Sirius.

“I don’t intend to tell him more than he *needs to know*, Molly,” said Sirius. “But as he was the one who saw Voldemort come back” (again, there was a collective shudder around the table at the name), “he has more right than most to ——”

“He’s not a member of the Order of the Phoenix!” said Mrs. Weasley. “He’s only fifteen and ——”

“—— and he’s dealt with as much as most in the Order,” said Sirius, “and more than some ——”

“No one’s denying what he’s done!” said Mrs. Weasley, her voice rising, her fists trembling on the arms of her chair. “But he’s still ——”

“He’s not a child!” said Sirius impatiently.

“He’s not an adult either!” said Mrs. Weasley, the color rising in her cheeks. “He’s not *James*, Sirius!”

“I’m perfectly clear who he is, thanks, Molly,” said Sirius coldly.

“I’m not sure you are!” said Mrs. Weasley. “Sometimes, the way you talk about him, it’s as though you think you’ve got your best

「時々、あなたがハリーの話を話するとき、まるで親友が戻ってきたかのような口ぶりだわ！」

「そのどこが悪いの？」ハリーが言った。
「どこが悪いかと言うとね、ハリー、あなたはお父さんとは違うからですよ。どんなにお父さんにそっくりでも！」ウィーズリーおばさんが、決るような目でシリウスを睨みながら言った。

「あなたはまだ学生です。あなたに責任を持つべき大人が、それを忘れてはいけませんわ！」

「わたしが無責任な名付け親だという意味ですかね？」シリウスが、声を荒らげて問い質した。

「あなたは向こう見ずな行動を取ることもあるという意味ですよ、シリウス。だからこそ、ダンブルドアがあなたに、家の中にいるようにと何度もおっしゃるんです。それに——」

「ダンブルドアがわたしに指図することは、よろしければ、この際別にしておいてもらいましょう！」シリウスが大声を出した。

「アーサー！」おばさんは齒痒そうにウィーズリーおじさんを振り返った。

「アーサー、なんとか言ってくださいな！」ウィーズリーおじさんはすぐには答えなかった。

メガネを外し、妻のほうを見ずに、ローブでゆっくりとメガネを拭いた。

そのメガネを慎重に鼻に載せ直してから、初めておじさんが口を開いた。

「モリー、ダンブルドアは立場が変化したことをご存知だ。いまハリーは、本部にいるわけだし、ある程度は情報を与えるべきだと認めていらっしゃる」

「そうですわ。でも、それと、ハリーに何でも好きなことを聞くようにと促すのとは、全然別です」

「私個人としては」シリウスから目を離れたルーピンが、静かに言った。ウィーズリーおばさんは、やっと味方ができそうだと、急いでルーピンを振り返った。

「ハリーは事実を知っておいたほうがよいと思うね——何もかもというわけじゃないよ、

friend back!”

“What’s wrong with that?” said Harry.

“What’s wrong, Harry, is that you are *not* your father, however much you might look like him!” said Mrs. Weasley, her eyes still boring into Sirius. “You are still at school and adults responsible for you should not forget it!”

“Meaning I’m an irresponsible godfather?” demanded Sirius, his voice rising.

“Meaning you’ve been known to act rashly, Sirius, which is why Dumbledore keeps reminding you to stay at home and ——”

“We’ll leave my instructions from Dumbledore out of this, if you please!” said Sirius loudly.

“Arthur!” said Mrs. Weasley, rounding on her husband. “Arthur, back me up!”

Mr. Weasley did not speak at once. He took off his glasses and cleaned them slowly on his robes, not looking at his wife. Only when he had replaced them carefully on his nose did he say, “Dumbledore knows the position has changed, Molly. He accepts that Harry will have to be filled in to a certain extent now that he is staying at headquarters ——”

“Yes, but there’s a difference between that and inviting him to ask whatever he likes!”

“Personally,” said Lupin quietly, looking away from Sirius at last, as Mrs. Weasley turned quickly to him, hopeful that finally she was about to get an ally, “I think it better that Harry gets the facts —— not all the facts, Molly, but the general picture —— from us, rather than a garbled version from ... others.”

His expression was mild, but Harry felt sure that Lupin, at least, knew that some Extendable Ears had survived Mrs. Weasley’s purge.

モリー。でも、全体的な状況を、私たちから話したほうがよいと思う——歪曲された話を、誰か……ほかの者から聞かされるよりは」ルービンの表情は穏やかだったが、ウィーズリーおぼさんの追放を免れた「伸び耳」があることを、少なくともルービンは知っている、ハリーははっきりそう思った。

「そう」ウィーズリーおぼさんは息を深く吸い込み、支持を求めるようにテーブルをぐるりと見回したが、誰もいなかった。

「そう……どうやら私は却下されるようね。これだけは言わせていただくわ。ダンブルドアがハリーにあまり多くを知ってほしくないとおっしゃるからには、ダンブルドアなりの理由がおありのはず。それに、ハリーにとって何が一番よいことかを考えている者として——」

「ハリーはあなたの息子じゃない」シリウスが静かに言った。

「息子も同然です」ウィーズリーおぼさんが激しい口調で言った。

「ほかに誰がいるっていうの？」

「わたしがいる！」

「そうね」ウィーズリーおぼさんの口元がぐいっと上がった。

「ただし、あなたがアズカバンに閉じ込められていた間は、この子の面倒を見るのが少し難しかったのじゃありません？」

シリウスは椅子から立ち上がりかけた。

「モリー、このテーブルに着いている者で、ハリーのことを気遣っているのは、君だけじゃない」

ルービンは厳しい口調で言った。

「シリウス、座るんだ」

ウィーズリーおぼさんの下唇が震えていた。シリウスは蒼白な顔で、ゆっくりと椅子に腰掛けた。

「ハリーも、このことで意見を言うのを許されるべきだろう」ルービンが言葉を続けた。

「もう自分で判断できる年齢だ」

「僕、知りたい。何が起きているのか」ハリーは即座に答えた。

ハリーはウィーズリーおぼさんのほうを見なかった。

おぼさんがハリーを息子同然だと言ったこと

“Well,” said Mrs. Weasley, breathing deeply and looking around the table for support that did not come, “well ... I can see I’m going to be overruled. I’ll just say this: Dumbledore must have had his reasons for not wanting Harry to know too much, and speaking as someone who has got Harry’s best interests at heart —”

“He’s not your son,” said Sirius quietly.

“He’s as good as,” said Mrs. Weasley fiercely. “Who else has he got?”

“He’s got me!”

“Yes,” said Mrs. Weasley, her lip curling. “The thing is, it’s been rather difficult for you to look after him while you’ve been locked up in Azkaban, hasn’t it?”

Sirius started to rise from his chair.

“Molly, you’re not the only person at this table who cares about Harry,” said Lupin sharply. “Sirius, sit *down*.”

Mrs. Weasley’s lower lip was trembling. Sirius sank slowly back into his chair, his face white.

“I think Harry ought to be allowed a say in this,” Lupin continued. “He’s old enough to decide for himself.”

“I want to know what’s been going on,” Harry said at once.

He did not look at Mrs. Weasley. He had been touched by what she had said about his being as good as a son, but he was also impatient at her mollycoddling. ... Sirius was right, he was *not* a child.

“Very well,” said Mrs. Weasley, her voice cracking. “Ginny — Ron — Hermione — Fred — George — I want you out of this kitchen, now.”

に胸を打たれていた。
しかし、おばさんに子ども扱いされることに我慢できなかったのも確かだった。
シリウスの言うとおりだ。
僕は子どもじゃない。

「わかったわ」ウィーズリーおばさんの声が掠れていた。

「ジニー——ロン——ハーマイオニー——フレッド——ジョージ。みんな厨房から出なさい。すぐに」

たちまちどよめきが上がった。

「俺たち成人だ！」フレッドとジョージが同時に喚いた。

「ハリーがよくて、どうして僕はだめなんだ？」ロンが叫んだ。

「ママ、あたしも聞きたい！」ジニーが鼻声を出した。

「だめ！」ウィーズリーおばさんが叫んで立ち上がった。目がらんと光っている。

「絶対に許しません——」

「モリー、フレッドとジョージを止めることはできないよ」ウィーズリーおじさんが疲れたように言った。

「二人ともたしかに成人だ」

「まだ学生だわ」

「しかし、法律ではもう大人だ」おじさんが、また疲れた声で言った。

おばさんは真っ赤な顔をしている。

「私は——ああ——しかたがないでしょう。フレッドとジョージは残ってよろしい。でもロー——」

「どうせハリーが、僕とハーマイオニーに、みんなの言うことを全部教えてくれるよ！」ロンが熱くなって言った。

「そうだよね？——ね？」ロンはハリーの目を見ながら、不安げに言った。

ハリーは一瞬、ロンに、一言も教えてやらないと言ってやろうかと思った。

何にも知らされずにいることがどんな気持ちかわかってみればいい、と言おうかと思った。

しかし、意地悪な衝動は、互いの目が合ったとき、消え去った。

「もちろんさ」ハリーが言った。

There was instant uproar.

“We’re of age!” Fred and George bellowed together.

“If Harry’s allowed, why can’t I?” shouted Ron.

“Mum, I *want* to!” wailed Ginny.

“NO!” shouted Mrs. Weasley, standing up, her eyes overbright. “I absolutely forbid ——”

“Molly, you can’t stop Fred and George,” said Mr. Weasley wearily. “They *are* of age ——”

“They’re still at school ——”

“But they’re legally adults now,” said Mr. Weasley in the same tired voice.

Mrs. Weasley was now scarlet in the face.

“I —— oh, all right then, Fred and George can stay, but Ron ——”

“Harry’ll tell me and Hermione everything you say anyway!” said Ron hotly. “Won’t —— won’t you?” he added uncertainly, meeting Harry’s eyes.

For a split second, Harry considered telling Ron that he wouldn’t tell him a single word, that he could try a taste of being kept in the dark and see how he liked it. But the nasty impulse vanished as they looked at each other.

“ ‘Course I will,” Harry said. Ron and Hermione beamed.

“Fine!” shouted Mrs. Weasley. “Fine! Ginny —— BED!”

Ginny did not go quietly. They could hear her raging and storming at her mother all the way up the stairs, and when she reached the hall Mrs. Black’s earsplitting shrieks were added to the din. Lupin hurried off to the portrait to restore calm. It was only after he had

ロンとハーマイオニーがにっこりした。
「そう！」おばさんが叫んだ。
「そう！ジニーー寝なさい！」
ジニーはおとなしく引かれてはいかなかった。
階段を上がる間ずっと、母親に喚き散らし、暴れているのが聞こえた。
二人がホールに着いたとき、ブラック夫人の耳を穿く叫び声が騒ぎに加わった。
ルーピンは静寂を取り戻すため、肖像画に向かって急いだ。
ルーピンが戻り、厨房の扉を閉めてテーブルに着いたとき、シリウスがやっと口を開いた。
「オーケー、ハリー……何が知りたい？」
ハリーは深く息を吸い込み、この一ヶ月間ずっと自分を悩ませていた質問をした。
「ヴォルデモートはどこにいるの？」名前を口にしたとたん、またみんながぎくりとし、身震いするのをハリーは無視した。
「あいつは何をしているの？ マグルのニュースをずっと見てたけど、それらしいものはまだ何にもないんだ。不審な死とか」
「それは、不審な死がまだないからだ」シリウスが言った。
「我々が知るかぎりではということだがーそれに我々は、相当いろいろ知っている」
「とにかく、あいつの想像以上にいろいろ知っているんだがね」ルーピンが言った。
「どうして人殺しをやめたの？」ハリーが聞いた。
去年一年だけでも、ヴォルデモートが一度ならず人を殺したことをハリーは知っていた。
「それは、自分に注意を向けたくないからだ」シリウスが答えた。
「あいつにとって、それが危険だからだ。あいつの復活は、自分の思いどおりにはいかなかった。わかるね。しくじったんだ」
「というより、君がしくじらせた」ルーピンが、満足げに微笑んだ。
「どうやって？」ハリーは当惑した。
「君は生き残るはずじゃなかった！」シリウスが言った。
「『死喰い人』以外は、誰もあいつの復活を知るはずじゃなかった。ところが、君は証人

returned, closing the kitchen door behind him and taking his seat at the table again, that Sirius spoke.

“Okay, Harry ... what do you want to know?”

Harry took a deep breath and asked the question that had been obsessing him for a month.

“Where’s Voldemort? What’s he doing? I’ve been trying to watch the Muggle news,” he said, ignoring the renewed shudders and winces at the name, “and there hasn’t been anything that looks like him yet, no funny deaths or anything —”

“That’s because there haven’t been any suspicious deaths yet,” said Sirius, “not as far as we know, anyway. ... And we know quite a lot.”

“More than he thinks we do anyway,” said Lupin.

“How come he’s stopped killing people?” Harry asked. He knew that Voldemort had murdered more than once in the last year alone.

“Because he doesn’t want to draw attention to himself at the moment,” said Sirius. “It would be dangerous for him. His comeback didn’t come off quite the way he wanted it to, you see. He messed it up.”

“Or rather, you messed it up for him,” said Lupin with a satisfied smile.

“How?” Harry asked perplexedly.

“You weren’t supposed to survive!” said Sirius. “Nobody apart from his Death Eaters was supposed to know he’d come back. But you survived to bear witness.”

“And the very last person he wanted alerted to his return the moment he got back was

として生き残った」

「しかも、蘇ったときに、それを一番知られたくない人物がダンブルドアだった」ルービンが言った。

「ところが、君がすぐさま、確実にダンブルドアに知らせた」

「それがどういう役に立ったの？」ハリーが聞いた。

「役立ったどころじゃない」ビルが信じられないという声を出した。

「ダンブルドアは、『例のあの人』が恐れた唯一の人物だよ！」

「君のおかげで、ダンブルドアは、ヴォルデモートの復活から一時間後には、不死鳥の騎士団を呼び集めることができた」シリウスが言った。

「それで、騎士団は何をしているの？」ハリーが、全員の顔をぐると見渡しながら聞いた。

「ヴォルデモートが計画を実行できないように、できるかぎりのことをしている」シリウスが言った。

「あいつの計画がどうしてわかるの？」ハリーがすぐ聞き返した。

「ダンブルドアは洞察力が鋭い」ルービンが言った。

「しかも、その洞察は、結果的に正しいことが多い」

「じゃ、ダンブルドアは、あいつの計画がどんなものだと考えてるの？」

「そう、まず、自分の軍団を再構築すること」シリウスが言った。

「かつて、あいつは膨大な数を指揮下に収めた。脅したり、魔法をかけたりして従わせた魔法使いや魔女、忠実な『死喰い人』、ありとあらゆる闇の生き物たち。やつが巨人を招集しようと計画していたことは聞いたはずだ。そう、巨人は、やつが目をつけているグループの一つにすぎない。やつが、ほんの一握りの『死喰い人』だけで、魔法省を相手に戦うはずがない」

「それじゃ、みんなは、あいつが手下を集めるのを阻止しているわけ？」

「できるだけね」ルービンが言った。

「どうやって？」

Dumbledore,” said Lupin. “And you made sure Dumbledore knew at once.”

“How has that helped?” Harry asked.

“Are you kidding?” said Bill incredulously. “Dumbledore was the only one You-Know-Who was ever scared of!”

“Thanks to you, Dumbledore was able to recall the Order of the Phoenix about an hour after Voldemort returned,” said Sirius.

“So what’s the Order been doing?” said Harry, looking around at them all.

“Working as hard as we can to make sure Voldemort can’t carry out his plans,” said Sirius.

“How d’you know what his plans are?” Harry asked quickly.

“Dumbledore’s got a shrewd idea,” said Lupin, “and Dumbledore’s shrewd ideas normally turn out to be accurate.”

“So what does Dumbledore reckon he’s planning?”

“Well, firstly, he wants to build up his army again,” said Sirius. “In the old days he had huge numbers at his command; witches and wizards he’d bullied or bewitched into following him, his faithful Death Eaters, a great variety of Dark creatures. You heard him planning to recruit the giants; well, they’ll be just one group he’s after. He’s certainly not going to try and take on the Ministry of Magic with only a dozen Death Eaters.”

“So you’re trying to stop him getting more followers?”

“We’re doing our best,” said Lupin.

“How?”

“Well, the main thing is to try and convince

「そう、一番重要なのは、なるべく多くの魔法使いたちに、『例のあの人』が本当に戻ってきたのだと信じさせ、警戒させることだ」ビルが言った。

「だけど、これがなかなか厄介だ」

「どうして？」

「魔法省の態度のせいよ」トンクスが答えた。

「『例のあの人』が戻った直後のコーネリウス ファッジの態度を、ハリー、君は見たよね。そう、大臣はいまだにまったく立場を変えていないの。そんなことは起こらなかったと、頭っから否定してる」

「でも、どうして？」ハリーは必死の思いだった。

「どうしてファッジはそんなに間抜けなんだ？ だって、ダンブルドアが——」

「ああ、そうだ。君はまさに問題の核心を突いた」ウィーズリーおじさんが苦笑いした。

「ダンブルドアだ」

「ファッジはダンブルドアが怖いのよ」トンクスが悲しそうに言った。

「ダンブルドアが怖い？」ハリーは納得がいかなかった。

「ダンブルドアが企てていることが怖いんだよ」ウィーズリーおじさんが言った。

「ファッジは、ダンブルドアがファッジの失脚を企んでいると思っている。ダンブルドアが魔法省乗っ取りを狙っているとね」

「でもダンブルドアはそんなこと望んで——」

「いないよ、もちろん」ウィーズリーおじさんが言った。

「ダンブルドアは一度も大臣職を望まなかった。ミリセント バグノールドが引退したとき、ダンブルドアを大臣にと願った者が大勢いたにもかかわらずだ。代わりにファッジが権力を握った。しかし、ダンブルドアが決してその地位を望まなかったにもかかわらず、いかに人望が厚かったかを、ファッジが完全に忘れたわけではない」

「心の奥で、ファッジはダンブルドアが自分より賢く、ずっと強力な魔法使いだと知っている。就任当初は、しょっちゅうダンブルドアの援助と助言を求めている」ルービンが言

as many people as possible that You-Know-Who really has returned, to put them on their guard,” said Bill. “It’s proving tricky, though.”

“Why?”

“Because of the Ministry’s attitude,” said Tonks. “You saw Cornelius Fudge after You-Know-Who came back, Harry. Well, he hasn’t shifted his position at all. He’s absolutely refusing to believe it’s happened.”

“But why?” said Harry desperately. “Why’s he being so stupid? If Dumbledore —”

“Ah, well, you’ve put your finger on the problem,” said Mr. Weasley with a wry smile. “Dumbledore.”

“Fudge is frightened of him, you see,” said Tonks sadly.

“Frightened of Dumbledore?” said Harry incredulously.

“Frightened of what he’s up to,” said Mr. Weasley. “You see, Fudge thinks Dumbledore’s plotting to overthrow him. He thinks Dumbledore wants to be Minister of Magic.”

“But Dumbledore doesn’t want —”

“Of course he doesn’t,” said Mr. Weasley. “He’s never wanted the Minister’s job, even though a lot of people wanted him to take it when Millicent Bagnold retired. Fudge came to power instead, but he’s never quite forgotten how much popular support Dumbledore had, even though Dumbledore never applied for the job.”

“Deep down, Fudge knows Dumbledore’s much cleverer than he is, a much more powerful wizard, and in the early days of his Ministry he was forever asking Dumbledore for help and advice,” said Lupin. “But it seems that he’s become fond of power now, and

った。

「しかし、ファッジは権力の味を覚え、自信をつけてきた。魔法大臣であることに執着し、自分が賢いと信じ込もうとしている。そして、ダンブルドアは単に騒動を引き起こそうとしているだけなんだとね」

「いったいどうして、そんなことを考えられるんだ？」ハリーは腹が立った。

「ダンブルドアがすべてをでっち上げてるなんて……僕がでっち上げてるなんて？」

「それは、ヴォルデモートが戻ってきたことを受け入れれば、魔法省がここ十四年ほど遭遇したことがないような大問題になるからだ」シリウスが苦々しげに言った。

「ファッジはどうしても正面きってそれと向き合えない。ダンブルドアが嘘をついて、自分を転覆させようとしていると信じ込むほうが、どんなに楽しめない」

「何が問題かわかるだろう？」ルービンが言った。

「魔法省が、ヴォルデモートのことは何も心配する必要がないと主張し続けるかぎり、やつが戻ってきたと説得するのは難しい。そもそも、そんなことは誰も信じたくないんだから。その上、魔法省は『日刊予言者新聞』に圧力をかけて、いわゆる『ダンブルドアのガセネタ』はいっさい報道しないようにさせている。だから、一般の魔法族は、何が起きているかまったく気がつきもしない。『死喰い人』にとって、それが勿怪の幸いで、『服従の呪い』をかけようとすれば、いいカモになる」

「でも、みんなが知らせているんでしょ？」ハリーは、ウィーズリーおじさん、シリウス、ビル、マンダンガス、ルービン、トンクスの顔を見回した。

「みんなが、あいつが戻ってきたって、知らせてるんでしょ？」

全員が、冗談拔きの顔で微笑んだ。

「さあ、わたしは気の触れた大量殺人者だと思われているし、魔法省がわたしの首に一万ガリオンの懸賞金を賭けているとなれば、街に出てピラ配りを始めるわけにもいかない。そうだろう？」シリウスが焦りじりしながら言った。

much more confident. He loves being Minister of Magic, and he's managed to convince himself that he's the clever one and Dumbledore's simply stirring up trouble for the sake of it.”

“How can he think that?” said Harry angrily. “How can he think Dumbledore would just make it all up — that *I'd* make it all up?”

“Because accepting that Voldemort's back would mean trouble like the Ministry hasn't had to cope with for nearly fourteen years,” said Sirius bitterly. “Fudge just can't bring himself to face it. It's so much more comfortable to convince himself Dumbledore's lying to destabilize him.”

“You see the problem,” said Lupin. “While the Ministry insists there is nothing to fear from Voldemort, it's hard to convince people he's back, especially as they really don't want to believe it in the first place. What's more, the Ministry's leaning heavily on the *Daily Prophet* not to report any of what they're calling Dumbledore's rumormongering, so most of the Wizarding community are completely unaware anything's happened, and that makes them easy targets for the Death Eaters if they're using the Imperius Curse.”

“But you're telling people, aren't you?” said Harry, looking around at Mr. Weasley, Sirius, Bill, Mundungus, Lupin, and Tonks. “You're letting people know he's back?”

They all smiled humorlessly.

“Well, as everyone thinks I'm a mad mass murderer and the Ministry's put a ten-thousand-Galleon price on my head, I can hardly stroll up the street and start handing out leaflets, can I?” said Sirius restlessly.

“And I'm not a very popular dinner guest with most of the community,” said Lupin. “It's

「私はとくれば、魔法族の間ではとくに夕食に招きたい客じゃない」ルービンが言った。

「狼人間につきものの職業上の障害でね」

「トンクスもアーサーも、そんなことを触れ回ったら、職を失うだろう」シリウスが言った。

「それに、魔法省内にスパイを持つことは、我々にとって大事なことだ。なにしろ、ヴォルデモートのスパイもいることは確かだからね」

「それでもなんとか、何人かを説得できた」ウィーズリーおじさんが言った。

「このトンクスもその一人——前回是不死鳥の騎士団に入るには若すぎたんだ。

それに、闇袂いを味方につけるのは大いに有益だ——キングズリー シャックルボルトもまったく貴重な財産だ。シリウスを追跡する責任者でね。だから、魔法省に、シリウスがチベットにいと吹聴している」

「でも、ヴォルデモートが戻ってきたというニュースを、この中の誰も広めてないのなら——」ハリーが言いかけた。

「一人もニュースを流していないなんて言ったか？」シリウスが遮った。

「ダンブルドアが苦境に立たされているのはなぜだと思う？」

「どういうこと？」ハリーが聞いた。

「連中はダンブルドアの信用を失墜させようとしている」

ルービンが言った。

「先週の『日刊予言者新聞』を見なかったかね？ 国際魔法使い連盟の議長職を投票で失った、という記事だ。老いぼれて判断力を失ったからというんだが、本当のことじゃない。ヴォルデモートが復活したという演説をしたあとで、魔法省の役人たちの投票で職を追われた。ウィゼンガモット法廷——魔法使いの最高裁だがその主席魔法戦士からも降ろされた。それに、勲一等マーリン勲章を剥奪する話もある」

「でも、ダンブルドアは蛙チョコレートのカードにさえ残れば、何にも気にしないって言うんだ」ビルがニヤッとした。

「笑い事じゃない」ウィーズリーおじさんがビシッと言った。

an occupational hazard of being a werewolf.”

“Tonks and Arthur would lose their jobs at the Ministry if they started shooting their mouths off,” said Sirius, “and it’s very important for us to have spies inside the Ministry, because you can bet Voldemort will have them.”

“We’ve managed to convince a couple of people, though,” said Mr. Weasley. “Tonks here, for one — she’s too young to have been in the Order of the Phoenix last time, and having Aurors on our side is a huge advantage — Kingsley Shacklebolt’s been a real asset too. He’s in charge of the hunt for Sirius, so he’s been feeding the Ministry information that Sirius is in Tibet.”

“But if none of you’s putting the news out that Voldemort’s back —” Harry began.

“Who said none of us was putting the news out?” said Sirius. “Why d’you think Dumbledore’s in such trouble?”

“What d’you mean?” Harry asked.

“They’re trying to discredit him,” said Lupin. “Didn’t you see the *Daily Prophet* last week? They reported that he’d been voted out of the Chairmanship of the International Confederation of Wizards because he’s getting old and losing his grip, but it’s not true, he was voted out by Ministry wizards after he made a speech announcing Voldemort’s return. They’ve demoted him from Chief Warlock on the Wizengamot — that’s the Wizard High Court — and they’re talking about taking away his Order of Merlin, First Class, too.”

“But Dumbledore says he doesn’t care what they do as long as they don’t take him off the Chocolate Frog cards,” said Bill, grinning.

“It’s no laughing matter,” said Mr. Weasley

「ダンブルドアがこんな調子で魔法省に衝突し続けていたら、アズカバン行きになるかもしれない。ダンブルドアが幽閉されれば、我々としては最悪の事態だ。ダンブルドアが立ちはいなくなり、企みを見抜いているとやつが知っていればこそ、『例のあの人』も慎重になる。ダンブルドアが取り除かれたとなれば——そう、『例のあの人』に、もはや邪魔者はいない」

「でも、ヴォルデモートが『死喰い人』をもっと集めようとするれば、どうしたって復活したことが表ざたになるでしょう？」ハリーは必死の思いだった。

「ハリー、ヴォルデモートは魔法使いの家を個別訪問して、正面玄関をノックするわけじゃない」シリウスが言った。

「編み、呪いをかけ、恐喝する。隠密工作は手馴れたものだ。いずれにせよ、やつの関心は、配下を集めることだけじゃない。ほかにも求めているものがある。やつがまったく極秘で進めることができる計画だ。いまはそういう計画に集中している」

「配下集め以外に、何を？」ハリーがすぐ聞き返した。

シリウスとルーピンが、ほんの一瞬目配せしたような気がした。

それからシリウスが答えた。

「極秘にしか手に入らないものだ」

ハリーがまだキョトンとしていると、シリウスが言葉を続けた。

「武器のようなものというかな。前の時には持っていなかったものだ」

「前に勢力を持っていたときってこと？」

「そうだ」

「それ、どんな種類の武器なの？」ハリーが聞いた。

「『アバダケダブラ』呪文より悪いもの——？」

「もうたくさん！」

扉の脇の暗がりから、ウィーズリーおばさんの声がした。

ハリーは、ジニーを上連れていったおばさんが、戻ってきていたのに気づかなかった。腕組みをして、カンカンに怒った顔だ。

「いますぐベッドに行きなさい。全員です」

shortly. “If he carries on defying the Ministry like this, he could end up in Azkaban and the last thing we want is Dumbledore locked up. While You-Know-Who knows Dumbledore’s out there and wise to what he’s up to, he’s going to go cautiously for a while. If Dumbledore’s out of the way — well, You-Know-Who will have a clear field.”

“But if Voldemort’s trying to recruit more Death Eaters, it’s bound to get out that he’s come back, isn’t it?” asked Harry desperately.

“Voldemort doesn’t march up to people’s houses and bang on their front doors, Harry,” said Sirius. “He tricks, jinxes, and blackmails them. He’s well-practiced at operating in secrecy. In any case, gathering followers is only one thing he’s interested in, he’s got other plans too, plans he can put into operation very quietly indeed, and he’s concentrating on them at the moment.”

“What’s he after apart from followers?” Harry asked swiftly.

He thought he saw Sirius and Lupin exchange the most fleeting of looks before Sirius said, “Stuff he can only get by stealth.”

When Harry continued to look puzzled, Sirius said, “Like a weapon. Something he didn’t have last time.”

“When he was powerful before?”

“Yes.”

“Like what kind of weapon?” said Harry. “Something worse than the *Avada Kedavra* —?”

“That’s enough.”

Mrs. Weasley spoke from the shadows beside the door. Harry had not noticed her return from taking Ginny upstairs. Her arms

おばさんはフレッド、ジョージ、ロン、ハーマイオニーをぐるりと見渡した。

「僕たちに命令はできないー」フレッドが抗議を始めた。

「できるかできないか、見ててごらん」おばさんが唸るように言った。

シリウスを見ながら、おばさんは小刻みに震えていた。

「あなたはハリーに十分な情報を与えたわ。これ以上何か言うなら、いっそハリーを騎士団に引き入れたらいいでしょう」

「そうして！」ハリーが飛びつくように言った。

「僕、入る。入りたい。戦いたい」

「だめだ」答えたのは、ウィーズリーおばさんではなく、ルービンだった。

「騎士団は、成人の魔法使いだけで組織されている」ルービンが続けた。

「学校を卒業した魔法使いたちだ」フレッドとジョージが口を開きかけたので、ルービンがつけ加えた。

「危険が伴う。君たちには考えも及ばないような危険がーシリウス、モリーの言うとおりだ。私たちはもう十分話した」

シリウスは中途半端に肩をすくめたが、言い争いはしなかった。

ウィーズリーおばさんは威厳たっぷりに息子たちとハーマイオニーを手招きした。

一人、また一人とみんなが立ち上がった。

ハリーは敗北を認め、みんなに従った。

were crossed and she looked furious.

“I want you in bed, now. All of you,” she added, looking around at Fred, George, Ron, and Hermione.

“You can’t boss us —” Fred began.

“Watch me,” snarled Mrs. Weasley. She was trembling slightly as she looked at Sirius. “You’ve given Harry plenty of information. Any more and you might just as well induct him into the Order straightaway.”

“Why not?” said Harry quickly. “I’ll join, I want to join, I want to fight —”

“No.”

It was not Mrs. Weasley who spoke this time, but Lupin.

“The Order is comprised only of overage wizards,” he said. “Wizards who have left school,” he added, as Fred and George opened their mouths. “There are dangers involved of which you can have no idea, any of you ... I think Molly’s right, Sirius. We’ve said enough.”

Sirius half-shrugged but did not argue. Mrs. Weasley beckoned imperiously to her sons and Hermione. One by one they stood up and Harry, recognizing defeat, followed suit.